附属幼稚園との交流で使用する絵本作成の教育実践の検討

－　ESD・SDGs の価値観を幼児に伝えるために　－

中嶋たや
（奈良教育大学附属中学校）
若森達哉・石木雅人・長友紀子
（奈良教育大学附属中学校）
村上睦美
（奈良教育大学　家庭科教育講座）
孫美幸
（文教大学学国際学部国際理解学科）

The Conception of Educational Practice which is Making a Picture Book to use in Interacting with Students in Attached Kindergarten:
To Convey the Values of ESD and SDGs to Young Children

Taya NAKAJIMA
(Junior High School attached to Nara University of Education)
Tatsuya WAKAMORI, Masato ISHIKI, Noriko NAGATOMO
(Junior High School attached to Nara University of Education)
Mutsumi MURAKAMI
(Department of Home Economics Education, Nara University of Education)
Mihaeng SOHN
(Faculty of International Studies,Bunkyo University)

要旨：本研究では、中学校での持続可能な社会の創り手の育成において、主体的に ESD の価値観を次世代に伝えようとする実践的態度を育むことを目的とし、教科横断的及び実践的・体験的な学習活動の一環として ESD に関する絵本の作成及び幼児への読み聞かせを実施した。本研究では、昨年度の実践をより確かなものにするために、ESD に関する学校教育全体における位置づけについて検討し、3 年生までの国語科・家庭科の授業だけでなく、授業全体で身につけた社会的見方を絵本づくりにどう生かせるかについて考えた。その結果、以下のことが明らかになった。生徒達は、自分たちが学んだ ESD の価値観を園児に伝えるためどのような物語にすべきかを考え、発達段階に応じた絵本に仕上げる工夫に努めた。

キーワード：持続可能な開発のための教育　Education for Sustainable Development
絵本の作成　making a picture book
絵本読み聞かせ　reading books to children
国語科　Japanese
家庭科　home economics

1．はじめに

奈良教育大学附属中学校 (以下本校と略す) 生徒と附属幼稚園園児との交流は、今年度で１３年目となる。高畑に移動しての交流で、大学の講義室を借りて授業を受けるクラスと、附属幼稚園で園児と交流するクラスとに分かれて行ってきた。

幼稚園との交流の現在のねらいは

(1) 幼児との触れ合いを通して、家庭科「保育」で、学習した幼児の体や心・生活習慣の発達についての理解を深める。
(2) 幼児との触れ合いを通して、自分自身について振り返る機会とする。
(3) 実習を通して、友人のふだんと違う一面を発見し、相互理解を深める。

である。

これまで本校では、家庭科の授業にて生徒と園児の交流を２時間続きで取り入れ、司会を中学生が行い、歌の交換→手遊び→自由遊びなどを行って交流を進めてきたが、2020 年以来コロナ禍となり、交流時間を１時間に短縮せざるを得なくなった。そのため、交流内容を絞ることにはなったが、継続的に取り組んでいる。具体的には、六角返し、紙コップを使ったパクパク人形を作り園児へのおみやげとするなどを行っている。

幼稚園児と交流することにより、中学生には自身の幼児期を振り返るだけでなく、自身や級友に対する肯定感を高める効果がある。あわせて、幼児に対する認識が改められることが確認できている。

このことは、中学生と幼児の交流に関する教育効果において、中学生は、交流体験前に比べ体験後は幼児に対して肯定的なイメージを持つ割合が増加し、否定的なイメージを持つ割合が減少したことや（藤原ら，2002）、交流を通して幼児との関わり方の工夫が身に付き、幼児の多様性・多面性を学んでいた（伊藤ら，2017）ことなどが報告されていることからも明らかである。

本実践は、昨年度国語科からの発案により始まったものである。幼稚園交流で使用する絵本を、「ESD とは何かを幼稚園児に伝える」をテーマに、国語科で物語を作り、家庭科の時間に仕上げる形で作成した。

昨年度は、国語科授業で附属中学校図書館司書東氏（以後東氏と記す）による絵本に関するレクチャーを受けた後、グループメンバーで協力して物語を作った。家庭科で絵本に仕上げていく際、「幼児の発達」の学習を活かし、「幼児の発達を考えて絵本を作成するように」ということを求めて、絵本作成に取りくませた。

今年度は、昨年度の実践を受けて、より質の高い絵本の作成ををめざし、国語科と協同で実践に取り組むことにした。昨年度の絵本の内容を紹介すると共に、今年度の実践を通して見えてきた成果と課題について述べる。

２．１年目の絵本から

上に述べたように、生徒達は、幼稚園交流に向けて、グループで協力して絵本を仕上げた。

その例を３つ紹介する。

◆「ぺぐぅのお引っ越し」（資料１）

（温暖化のため）氷の家が溶けて、引っ越しせざるを得なくなったペンギンのペグゥが、何度も挫折しながらも、いろいろな動物の仲間の助けを得て飛行船を完成させ、無事引っ越しをする話→地球温暖化の問題

◆「ちいさなせかい」（資料２）

人間のペットボトルポイ捨てのせいで、ごみの怪物ゴミミくんになってしまったキレレくんを元に戻すため、人間と共にペットボトルゴミを回収して、キレレくんがもとにもどるという話→ペットボトルごみの問題

◆「もりはともだち」（資料３）

森に住む仲間がくまの店ができて、木でできた便利な物を買い続けた結果、森の木が減り、自分のすみかも無くしてはじめて事の重大さに気づき、くまに木を切りつづけることをやめるようお願いし、熊と共に植林し、森を元の姿にもどすという話→便利さだけを追求することによる森林伐採の問題

絵本作成の段階では、先に述べた通り、交流する対象クラスの園児に対応したものにすることだけは指示した。多くを指示しなくとも、彼らなりに気候変動・環境について考え、園児にわかりやすい内容になるよう工夫した絵本に仕上げることができた。

交流当日の読み聞かせでは、園児の反応があまり感じられず、生徒達は自分たちのメッセージが伝わっていないのではないか、と不安を感じた者も少なくなかった。しかし、後日、幼稚園の先生にお聞きすると、贈呈した絵本に対する反応は良い、ということであり、園児は緊張していたためであるかと考えられる。各作品に対して、幼稚園の先生方から批評いただけるようお願いしていたが、多忙のためかいただけていない。

３．今年度の実践に向けて

本校では、ESD を長くテーマに研究してきた。ホールスクールアプローチで取り組み、各教科・総合を通じて、ESD の理念を子ども達に伝えてきた。

たとえば、家庭科では、生活を批判的に見つめることを基本に生活について学ばせている。エシカル消費を切り口に、食生活を考える、レジ袋の問題からプラスチックの問題について考えるなど家庭科は ESD と密接に関係する教科であると考える。

保健体育では、２年時、水の問題、ゴミの問題などを通じて環境問題について学ぶ。他教科もふくめて子ども達は ESD について学んでいる。

文部科学省の持続可能な開発のための教育のページの「ESD とは」によれば、

> ESD は Education for Sustainable Development の略で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があります。ESD とは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。つまり、<u>ESD は持続可能な社会の創り手を育む教育</u>です。

とある。

また、本校研究紀要第47集の「『人に出会う』学びによる子どもの変容」の要旨では、

『臨海実習』『奈良めぐり』『沖縄修学旅行（沖縄の旅）』といった行事の取り組みを、他者性を介した（『人に出会う』）学びから構想することによって、より生徒自身が主体的に社会に関わる力を身につけ、『なぜ、学ぶのか』『学んだことをどのように社会に実現させて行くのか』『そのための主体はどのように形成されるのか』というESDの本質まで迫る自己変容の様子を、ナラティブから読み解く（吉田他、2019）

と示されているように、本校では、この持続可能な社会の創り手を育むため、臨海実習・奈良めぐり・沖縄修学旅行などで、「人に出会う」実践を行ってきた。子ども達は、いろいろな背景を持つ人々と出会う中でいろいろな価値観にふれてきた。

ESDでは、「つなぐ」というキーワードも大切にしてきており、本校生徒は、行事で「ひとに出会う」の活動を通して、ESDの価値観を自分たちのものにしつつある。今度は、自身が伝える側として園児に「ESDとは何か？」を伝えてほしい、そんな願いから2年目の実践に取り組んだ。

３．２年目の実践

今年度の実践も、基本的には、１年目と同じ形で取り組んだ。国語科で、物語を作り、家庭科で絵本の形に仕上げる形である。

この実践に取り組むことの目的は、中学生が自身の学びを振り返り、深めることにある。

中学生は、絵本作成を通して３年間学んできたことの中から幼稚園児に伝える。「人に会う」で学んで来たことを園児に伝えることにより、自分が学んできたことの振り返りとなる。

また、伝えたい内容を園児が理解できるように噛み砕き絵本にすることにより、ESD・SDGsに関する内容をより深く理解することができる

絵本の作成は一人で行うことも可能であるが、グループで取り組むことによって、ESDの価値観について、仲間と討論することが可能となる。仲間と討論を重ねることによって、幼児に伝える内容が吟味されると考えた。

取り組みの実際は、次のとおりである。

３．１　国語科での取り組み　　全３時間（各１時間）

① ESDをテーマとする筋を考える
② ストーリーを仕上げる
③ 発表する→仲間からのアドバイスを受ける

各班ごとに、ESDを幼児に伝えるための、物語を考えたのち、内容や幼児に伝わるものになっているかについてのアドバイスを受けた上で、物語を完成させた。アドバイスを受けることにより、物語の内容が充実したものになった。

３．２　家庭科での取り組み　全９時間

(1) 幼児の発達の授業・・・9月教育実習期間中に教生が担当　各１時間
幼児の体の発達
幼児の心の発達

(2) 東氏から絵本についての話を聞く。

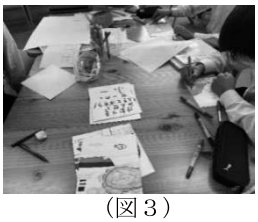
(3) 既存の絵本の分析
○０～２歳向け
○３～４歳向け
○５～６歳向け
に大きく分け、それぞれの発達段階に合わせている点について分析する。・・・(2)・(3) 合わせて２時間

（図１）

（図２）

(4) 絵本の作成　　全４時間
①絵コンテを考える（資料４）
②下絵を書く
③ペンでなぞって色づけしていく
④文字を書き込む。

と言う形で進めた。(4)の作業の進め方については、グループに任せた。下絵を集中して進める班もあれば、１場面ずつ進める班もあった。



（図３）

今年度は、昨年度と違い、絵本の作成に関わる授業については、国語の授業・家庭科の授業とも学校図書館で行った。

そのことにより、物語作りの過程でも、絵本作りの作業を進める上でも、東氏のアドバイスを受けることができた。自分たちが伝えたい内容について、東氏のアドバイスにより、園児の発達段階に合わせた表現になるよう工夫した。

３．３　生徒の声･･･絵本作り取り組んで

＜生徒１＞

①テーマ：海の豊かさを守ろう

②テーマを伝えるための工夫：海に、ペットボトルがたくさん流れていってしまって、結局最後は人間の体調が崩れてしまうということをつかって、海の豊かさを守らないと自分たちが困ってしまうと言うことを工夫しました。

③絵本作成の感想：絵本を作るのは難しいと言うことが身に染みてわかった。

絵本というと、幼稚であんまり内容がつまっていないような気がするのだけれど、子どもに向けられて作られている絵本は本当に工夫されているということに、今回はじめて感動しました。自分たちが絵本を作る上で難しかったことといえば幼児に伝わりやすい言葉で難しい内容のことを伝えるということでした。主人公を設定するところから、どうやって海の豊かさを守ることにつなげていけばいいのかさっぱりわからなかった。でも、班のメンバーと話し合いながら、少しいい本ができたと思うのでよかったと思いました。

＜生徒２＞

①テーマ：海の豊かさを守ろう

②テーマを伝えるための工夫：主役を「なるっぱー」にして、海の冒険に出かけるようにしました。海の中で、ゴミの問題に気づき、その対策をみんなでするというような話にし、SDGs について、関心を引き出せるようにしました。

③絵本作成の感想：より幼児に伝わりやすいものにするには、どうすればいいのか、ということを考えて制作しました。私は、全体のリーダーと文字担当をしていたのたですが、文字でも丸いのか、角ばっているのか、書道風にするのか、かっこよくするのかで、何通りも方法がありました。だから、どのような文字にするのかを何度も話し合いました。また、絵でも、どのような絵が見やすいのか、文字と絵の配置はどうするのかなど、たくさんのことを話し合いました。この作業をしていて、私が一番考えたことは、この６人で、どのような担当で作業をするかということです。下書きを書くまでにのこりのメンバーはすることがない状態になってしまうことは避けたかったので、担当を分け、効果的にできるようにしました。この活動を通して、メンバーとともに、SDGs について考え、幼児に何ができるのかをしっかりと考えることができたので、良かったです。

＜生徒３＞

①テーマ：ランドセルの色を例にしたジェンダー平等の問題について

② ESD のテーマを伝えるために工夫したことは？：幼稚園生でも分かる内容にするために、もうすぐランドセルを買う時期だからランドセルをテーマにした

③絵本作成で考えたこと・感想：相手に伝えるのにはどうすればいいのかを考えるのが難しかったです。対象年齢によって絵本の形がかなり変わってくるので、幼稚園生が読みやすい文字の量などを調べて、なるべく大きく文字を書いたりしました。みんなで役割を分担して絵本を作っていくのはとても楽しかったし、色々な意見がでて、広い視野で考えていくことができました。幼稚園生が自分で読みたくなるような絵本を作ることができたのかはわからないけど、小さい頃からジェンダーについて少しでも理解しておくことで小学生になったときにどちらの立場の場合でも生活しやすいのではないかと思い、今回このテーマの絵本を作ることができてよかったです。

３．４　生徒の声から見えること (考察)

生徒たちのコメントに「主人公を設定するところから、どうやって海の豊かさを守ることにつなげていけばいいのかさっぱりわからなかった。でも、班のメンバーと話し合いながら、少しいい本ができたと思うのでよかったと思いました。」「この活動を通して、メンバーとともに、SDGs について考え、幼児に何ができるのかをしっかりと考えることができたので、良かったです。」「みんなで役割を分担して絵本を作っていくのはとても楽しかったし、色々な意見がでて、広い視野で考えていくことができました。」といった言葉に表れている通り、生徒たちが絵本の絵コンテを考え、物語を絵本の形にしていく中で、仲間と ESD や SDGs の価値観に論議し、より幼児に伝えるためにどうすればよいか話しあっていた。このことは、国語科教諭である石木のコメント「対象年齢に合わせて内容を構築しながら、なおかつ物語性を出すのが難しかったです。しかし、生徒たちはその点も含めうまく話し合ってやっていました。少ない文字数で年少向けに物語を作るのが特に難しかったです。」からも明らかである。

一方で、テーマを考える際、環境、特に海の豊かさということに流れる傾向が見られた。いくつかのグループはジェンダー平等をテーマとしていたが、ESD・SDGs で取り上げられるテーマはもっと多様である。物語を考える段階で指導者からのアドバイスがあるべきであった。

多くの生徒は「幼児の発達段階にあった絵本かどうか」についてはかなり強く意識していた。実際、年少組対象の絵本では、絵で物語の内容を示す、文章でなく、言葉のリズムを楽しめる物にする努力が見えた。また、年長組対象の絵本では､物語を考えた物にする努力が見えた。家庭科的には、その部分も大切にしたいところである。しかし、「ESD とは何かを伝える」という点がこの実践の大きなねらいである。この点について、国語科教諭との話し合い・連携が不十分であったためである。

３．成果と課題

今年度は、幼稚園交流の時期が例年より遅くなったため、園児への読み聞かせができていない。現時点での、

成果と課題をまとめる。

３．１　成果

(1)　子ども達は、自分たちが学んだ ESD の価値観を園児に伝えるためには、どのような物語にすべきか、また、絵と文の配置をどうするかなど仲間との話し合いの中で、よりよい形を熱心に模索した。

(2)　先にも述べた通り、学校図書館で授業することにより、物語の作成、絵本の作成を通じて、絵本の専門家でもある東氏のアドバイスを得ることができた。そのことにより、発達年齢を意識した表現の工夫は、昨年度よりはっきりと見られた。

３．２　課題

(1)　幼稚園交流から逆算して、教育実習中であるという厳しさはあるが、9 月初旬からの取り組む必要がある。

今年度は、早めから取り組んだつもりであったが、家庭科は週 1 時間の授業であり、結果的に交流日ギリギリに仕上がることにある。教師間の分担も含めて 1 学期から計画を立てて取り組むことが必要。

(2)　美術科からの提案があり、来年度は、絵本の作成を美術科で行うことを考えている。家庭科で発達についての授業を行い、それを受けて国語科で物語を作り、美術科で絵本に仕上げる、と考えるとさらに綿密な計画を立てることが必要となる。

(3)　評価に関する面での課題もある。

①「幼児の発達課題にあう絵本を作る」と考えたとき、低年齢対象の絵本では、物語性が薄くなる。この場合、国語科としては、文章に求める質をどこに置くかに難しさが出てくる。

②家庭科としても、完成した絵本だけの評価でなく、製作過程の評価をしてやりたいが、グループで作業することによる難しさがある。

③「ESD を幼児に説明するものとして適切な絵本であったかどうか」の評価について、国語科で評価するのか、トータルのものとして家庭科で評価するのか、来年度は、絵本の製作については、美術科の授業で行うことを考えている。三者で評価基準について十分に相談しておくことが必要であると考える。

(4)　今年度は、作業分担をしやすくするために薄い画用紙を貼り付ける形を取ったが、より望ましい形を考えると、製本キットの形がのぞましい、とも考える。

(5)　この取り組みの考えのスタートとして、「ESD とは何か？」を幼児に伝えると言うことがある。今回、水に関わるものが多かった。幼児に ESD とは何か？について多様なテーマを通じて知らせることが望ましいと考えたとき、テーマの重なりはできるだけ避けたい。物語の作成の段階で、テーマのかぶりについて調整することが求められる。

あるいは、指導者の方で、テーマ設定の柱となるものを複数提示し、その中で分担を決める形も考えられるかも知れない。

今年度の幼稚園交流を終えた後、課題となる点について再度整理して、来年度の実践に備えたい。

参考文献

(1)　浜村京子（2005），「中学生との交流が幼児の遊び行動に与える影響」，小児保健研究，pp.316-321

(2)　藤村由美子（2002），猪野郁子，「中学生の幼児ふれあい体験学習に関する研究」，島根大学教育学部紀要（教育科学），第 36 巻，pp.27-35

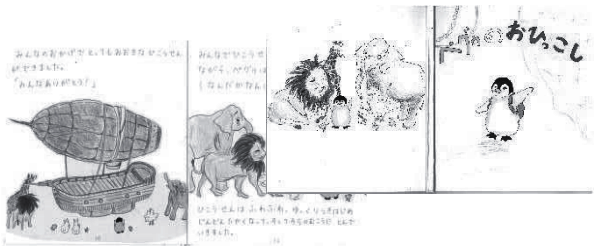
(3)　荒井良二，山本容子，100%ORANGE（2007），絵本をつくりたい！，成美堂出版，ページ等 .

(4)　つるみ ゆき（2013），絵本つくりかた，技術評論社，ページ範囲等 .

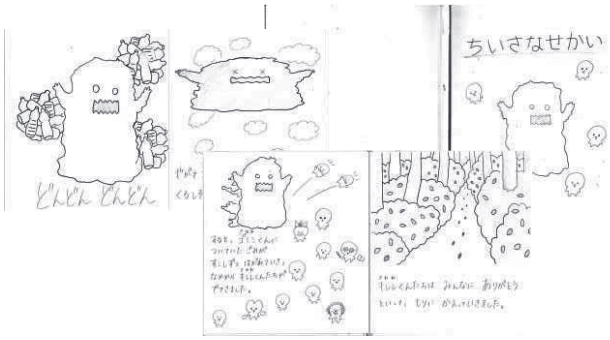
(5)　文部科学省，持続可能な開発のための教育 (ESD：EducationforSustainableDevelopment)，https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm，2022 年 11 月 23 日

(6)　吉田　寛 他 (2019)，「『人に出会う』学びによる子どもの変容－ ESD の価値観の根っこに迫る『総合的な学習の時間』の具体化にむけて－」，奈良教育大学附属中学校研究紀要，第 47 集，p.71

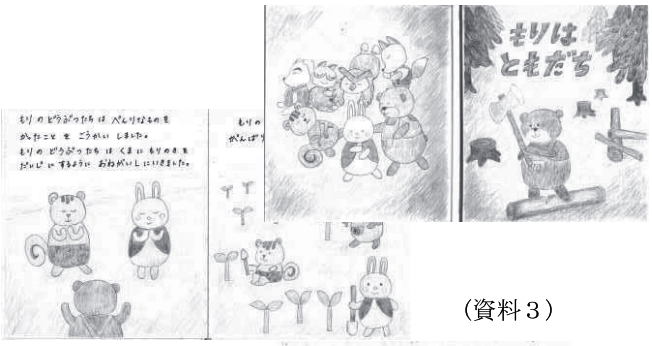
資料



（資料１）



（資料２）



（資料３）

（資料４）